



# アカシア俳句会



令和四年 秋季俳句会（令和四年十月）「句評」 「秋」の季語を含む一〜五句

## 一、「特選句」 選定句評

○墳（つか）の主名乗らぬままの秋の月

中野亘子

◆無口で正義感に満ち倫理の人が故郷に静かに眠る様を詠んだ句に思える。友人を亡くした人間には心に迫るものがある。

都 福仁

○大和路の歌碑彩りて曼殊沙華

中野亘子

◆大和路という歴史的な名所、色彩感覚に満ちた情景もいいうえに、選ばれた言葉も簡潔で美しいと思います。

山家由紀

○猫じやらし塀の隙間の土僅か

中野亘子

◆着眼点に感服。猫じやらしが揺れる景色に命の尊さを表し、「強く生きろ」と励ましてくれているような句。

藤井光正

○奥琵琶湖まん丸の月の泳ぐなり

戸堂博之

◆空のまん丸い月が、奥琵琶湖の水面にうつっているのが泳いでいるように見える。

楠野圭子

○バッタの子小さき影も生きてこそ

藤井光正

◆「生きもの」（バッタ）の影のありさまに視点を当て、「生きている」ことの意義を表現した点は素晴らしい。

前田秀一

○鳴き鳴きて啼きて逝くのか秋の蟬

藤井光正

◆色々な出来事への切なさ、悔しき、哀しみ、泣きたい思いが、痛いくらい伝わってきました。

野本展子

○「来ましたよ」炎揺らめき秋彼岸

加龍恵子

◆静かに「魂の交流」が感じられる墓参りの様子。自分も心を整えてお墓参りしたいと思いました。

西村敏治

◆「来ましたよ」の一言で夫に会いに来た喜びが表現され、紅く乱れ咲き風に揺れている彼岸花が目に見えかぶ。

佐藤茂弘

○永き友急いで逝くか秋さびし

西村敏治

◆そのままの素直なお気持ちの句に心より共感し涙いたします。

加龍恵子

吉田以登

## ○やさしさを人に伝へし紅葉散る

佐藤茂弘

◆いつでも誰にでも優しく接してくださった陽典さんを散る紅葉に擬えた心に沁みる追悼の句だと思いました。

中野亘子

◆一読。俳句の豊かさを伝えて下さった今は亡きリーダー陽典氏が脳裏に浮かび、又、句の佇まいの好もしさに、特選と。

網 佑子

## ○知らぬ間に手振り合わせて盆踊り

吉田以登

◆秋の句はうつつうしいのが多い中で、生き生きとして若さを感じます。「ヨイヨイヨイ」と心は今も盆踊りです。

戸堂博之

## ○秘め事も照らし出すよな今日の月

野本展子

◆今年の月は、とりわけ明るく美しかったです。秘め事が素晴らしい。

吉澤志保子

◆今年は十五夜、十三夜とも月を愛でることが出来ました。月に人が住む時代、自然の大きな力とロマンを感じます。

三木徳彦

## 二、「編集後記」

◆戸堂博之さんの紹介で、藤井光正さんが「投句」&「選句」会員として入会されました。藤井光正さんの自己紹介…

本年四月一日付けで三国丘高校長を拝命した藤井光正と申します。芥川高校で四年間、八尾高校で五年間校長を務め、十年目の今年皆



様にお目にかかることになりました。

俳句とは縁遠く、これまで一度も句を作ったことがありません。

戸堂博之様から「老後の趣味として俳句は最高ですよ」とお誘いいただき、僭越ですが入会を願ひ出しました。

よろしくお願ひいたします。

◆岩壺克哉さん（八月九日）に続き、中野陽典さん（九月十七日）が黄泉の国へ旅立たれ、富岡訓子さん（三月十九日）と併せ三人との淋しいお別れがありました。

ここに、生前のご活躍を偲び、謹んでお悔やみ申し上げます。

## 五月闇筆箱横に花母からだ

岩壺克哉

この度、私も恥ずかしながら、初めて俳句を作ってみました。

先日、夏井いつき著（二〇二二年版）『365日季語手帖』（レゾンクリエイト）を購入して学ぶ中で、まねごとで詠んだ三句です（「夏季俳句会」句報参照）。

「夏季俳句会」へ参加させていただきますならば誠に幸いでございます。

よろしくお願ひいたします。

岩壺克哉

老後又かくて二人や柏餅

中野陽典

夏季俳句会（令和三年六月） 最後の投句作品より

中野陽典さんは、令和三年「夏季俳句会」に五句投句されて後入院手術をされた由、その後、リハビリの成果もあつてかなり状態がよくなられ、「冬季・新年俳句会」（令和四年一月）および「春季俳句会」（令和四年四月）には、総括講評として「私が選んだ句」特選三句・秀句一二句を挙げ会員を励ましていただきました。

また、当会の先駆的俳句会である「金剛俳句会」創立当初より七年半（二〇一三〜二〇二〇年）の永きにわたり主宰を努められ、当会が規範とする「土生俳句論」についてご指導とともに「会」の運営において大変お世話になりました。

生前のご尽力に深く感謝し御礼申し上げます。

### ◆「土生重次師俳句論」（\*\*）

\*：小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき』（復刻）扉俳句会運営委員会

当会が規範とする土生重次師の俳句論を作句の指針として活かしていただければと考え、今号（令和四年秋季俳句会）より基本編から順次取り上げてご紹介します。

## 《今回の学び》

俳句はモノに託して心を詠う文芸である

百四十四頁

冬灯皿にのこりし海老の殻

松田黎子

「冬灯」は「寒灯」ともいわれるが、必ずしも寒中の灯火のことではない。寒さのきびしい冬の灯火をいう。山本健吉編の歳時記によれば「寒々とした冬の灯火のこと。灯火が身じろがずともっているさまは、春灯の艶、秋灯の清燈とはまた別の趣のあるものである」と述べている。

右の句の色彩感覚の豊かさが、この「冬灯」の季語の働きを借りて印象鮮明な佳句として頭っている。宴のあと、といった豪華な食事ではあるまい。庶民の食卓にちらかされた「海老の殻」が一抹のわびしさを誘う。表面では、そうおしゃべりをしていない。まったく「もの」を提示しているだけである。

「俳句は沈黙の文学」といわれている。「寄物陳思」（\*）の文学である。「もの」に託して、心を詠うのである。黎子作の「こころ」を味わっていただきたいと思う。

\*：物だけを表面的に歌って思いを表現する、いわゆる隠喩（例えの形式）。

ついつい陥る「身近な観念的」という陥穽かんせい（落とし穴）がある。

それは「心」と「情」という精神的な働きを直接的に詠ってしまうことである。

以下の句は総合誌の投句欄に、入選として発表されているものだ。これらの「心」や「情」はまさしく常識的である。発想が「常套的」ともいえる。

### 急逝の悔いを深めて姉の盆

「急逝」と言われれば「悔いを深める」のは「健全な一般人が共通に持っている、または持つべき、普通の知識や思慮分別」である。ましてやその答えは「姉の盆」なのだからこれ以上の当たり前はない。

われわれは俳句作品を読んで、作者と感動を共有したいのだ。常識・常套的な情を読まされても鼻白むだけである。

### 軒淋し燕帰りし昨日今日

「燕」が帰った「昨日今日」は「軒」が「淋しい」と思うのは常識ではないか。

### 耐へ忍ぶ大暑の責め苦病上り

あえて言うこともないほどの「当たり前」である。

余生はや透きてみえけり月見草

まだ少し命惜しめる茅の輪かな

やりきれぬ思ひぞ深む盆をどり

人逝きて又人逝きて秋の風

以上四句は実体のない句だと言わざるを得ない。

「観念的」とは、「頭の中だけで考えるさま」であるが、考えた結果「情的に表現」したときこのような作品になるのである。

心の句の弱さは、季節は何でもよい。季語が動く。モノで詠んだ句は、これしかないという季語がある筈。